

今は昔、遣唐使せんとくしの唐たうにある間に、妻を設けて、子をませせつ。その子いまだいとけなき程に、日本に帰る。妻に契ちぎりて曰く、「異遣唐使いせんとくし行かんにつけて、消息せうそくやるべし。またこの子、乳母あめのと離れん程には迎へ取るべし」と契りて帰朝しぬ。母、遣唐使せんとくしの來るごとに、「消息やある」と尋ねれど、敢へて音もなし。母大おほきに恨みて、この児を抱きて、日本へ向きて、児の首に、遣唐使せんとくしそれがしが子といふ札を書きて、結ひつけて、「宿世すくせあらば、親子の中は行きあひなん」といひて、海に投げ入れて帰りぬ。

父ある時難波なにはの浦の辺を行くに、沖の方に鳥の浮びたるやうにて、白き物見ゆ。近くなるまに見れば、童わらはに見なしつ。怪しければ、馬を控へて見れば、いと近く寄りくるに、四つばかりなる児の白くをかしげなる、波につきて寄り來たり。馬をうち寄せて見れば、大なる魚の背中に乗れり。従者をもちて、抱き取らせて見れば、首に札あり。遣唐使せんとくしそれがしが子と書けり。さは、我が子にこそありけれ、唐にて言ひ契りし児を、問はずとて、母が腹立ちて、海に投げ入れてけるが、然るべき縁ありて、かく魚に乗りて來たるなめりと、あはれに覚えて、いみじうかなしくて養ふ。遣唐使せんとくしの行きけるにつけて、この由を書きやりたりければ、母も、今ははかなきものに思ひけるに、かくと聞きてなん、希有きゆうの事なりと悦びける。

さてこの子、大人になるままに、手をめでたく書きけり。魚に助けられたりければ、名をば魚養うをかひとぞつけたりける。七大寺ななだいじの額くどもは、これが書きたるなりけりと。